

「賀古駅家、発掘ものがたり」 19 <唐居敷の門>



<方立穴（右側）と軸擦穴（左側）>



<丸く摩滅した軸擦穴>

唐居敷の調査は順調に進みました。相手は大きな重たい石のことですので、多少でこずったこともありましたが、まずまず思い描いていたイメージどおりに調査できました。かつては竜山石の石工さんだった義父から借りてきたテコも役立ちましたし、傷つけないようにクッションがわりの土嚢袋も牽引用ロープも役立ちました。

番組の撮影的にもまずまずだったと思います。唐居敷の方立穴、軸摺穴がきれいに見つかったときは、さすがに興奮しました。映像には生の迫力が映し出されています（ヤラセなし!）。賀古駅家の門を支えていた唐居敷が1,300年近い時を隔てて再び目の前に現れたのです。特に、軸摺穴は円を描くように摩滅しており、長い間、何回も門を開閉していたという当時の様子が刻み込まれているようでした。

この唐居敷の発見により、上郡町野磨駅家と同様の唐居敷が賀古駅家に使われていたことが明らかとなり、賀古駅家の門の形式も野磨駅家と同じ八脚門であったと考えて間違いないでしょう。

以前書きましたとおり、この遺跡は学史的に有名だったので、これまで多くの研究者がこの場所を訪れました。しかし誰も唐居敷の存在に気づかずにいたのです。それが、上郡町野磨駅家の成果を受け、駅家で2カ所目となる唐居敷の発見につながったのでした。唐居敷をもつ頑丈な八脚門は野磨駅家の特殊性であるといわれていましたが、2例目の発見により、播磨駅家に共通する要素である可能性もでてきました。頑丈な門の必要性はその施設が時に軍事的な役割をもったことをうかがわせますし、事実駅家は兵部省という軍事を扱う役所が管理していることもうなずけます。

今回の発見には地元の方々の努力があったことも忘れてはなりません。戦後、賀古駅家周辺の開発が進み、賀古駅家の痕跡も次々になくなっていく中、地中から出てきた礎石についても建築用材や埋め立てに使われ散逸しつつあったそうです。そこで地元の方々はこれ以上礎石が失われることのないよう、出てきた礎石を大歳神社に運び、二度と運び出されないために石碑の台石として固めて散逸から守ってこられました。こうした保護が行われていたからこそ、現在も賀古駅家の礎石が存在し、昔に思いを巡らす大切な鍵として活用することができているのです。

唐居敷を見ながら、賀古駅家の立派な八脚門を想像してみてください。駅家にやって来る外国の使者が門をくぐり、おもてなしの宴が行われなど、日本最大の馬数をかかえる、にぎやかな駅家の様子が浮かんでくるようではありませんか。扉を開け閉めするギーという音まで聞こえてくるようです。

兵庫県立考古博物館 学芸員 中村 弘